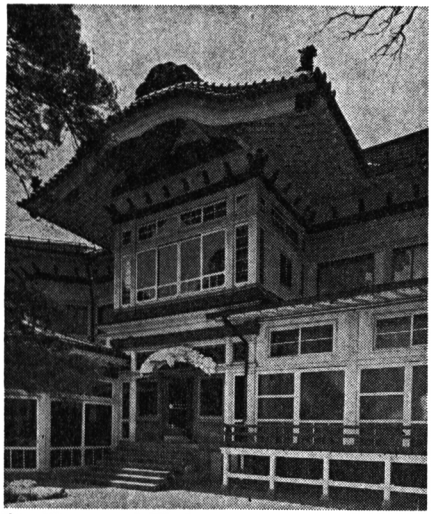
沢、坂を上って堂ヶ島、つづいて宮ノ下、底倉、木賀、南へむかって芦之湯、以上が七湯である。この道は温泉道と呼ばれ、江戸時代に整備されていた。明治になると、昔ながらの旅館のほか、外人むけの洋風旅館も建てられる。湯本の福住、宮の下の富士屋ホテルは、海外にまで、その名を知られるに至った。

富士屋ホテルは一八八三（明治十六）年、宮の下の大火によって全焼したが、直ちに再建にかかり、一八八四（明治十七）年に洋風の平屋一棟、一八九一（明治二十四）年に本館を完成した。その後も増築をかさね、明治後期の代表的な洋風建築として、その面影をとどめている。


富士屋ホテル玄関（1851年）
（株）富士屋ホテル提供

鉄道が通じると、温泉道から奥に入った地域にも、温泉が開発されていった。小湧谷・強羅・仙石原・姥子などが、新しい温泉である。もっとも湯本から先は、駕籠（かご）やチェアに頼らなければならなかったが、浴客たちは好みにしたがって、山の奥の温泉まで足を伸ばしたのであった。強羅まで箱根登山鉄道が開通したのは、一九一九（大正八）年のことである。

小田原から人車鉄道（のち熱海軌道）を利用すれば、湯河原へ、また熱海へ達することができる。湯河原も古くから開かれた温泉であった。箱根にくらべれば、交通は不便であったが、湯河原は切り傷に卓効があると言われ、日清・日露の戦争に際しては陸軍の転地療養所が設けられて、その名を高めた。しかし湯河原や熱海が大衆に親しまれる温泉となるのは、やはり鉄道が開通する一九二五（大正十四）年か



©神奈川県立公文書館

ら後のことである。

## 三　明治の文人と作品

### 実録と大衆小説

一八七八（明治十一）年十月二十六日の夜半、大住郡真土村（現在 平塚市）に大事件が起こった。地主の松木長右衛門宅を村民六十余名が襲撃し、一家の者を殺傷したのである。地主の態度について、かねてから抱いていた農民たちの恨みが爆発したものであった。主謀者の冠弥右衛門をはじめ、暴動に参加した人びとは直ちに捕えられ、裁判の結果、斬罪・懲役の刑に処せられた。世にいう真土村騒動である。この首謀者たちが護送される途中、「平塚から横浜までの間、道路の両側に見送りの人々が垣をつくったように並んでいた。その人々の過半以上が見送りで見物ではない。到る所でだれが音頭をとるともなく、南無阿弥陀仏と称名の声が起った。」（長谷川伸『自伝随筆』）

長谷川伸の母は生家が横浜の戸塚にあり、見送りに並んだなかの一人であった。送られる人たちは、殺人を犯したものである以上、極刑はまぬがれない。しかし彼らの動機には、庶民にとって共感をよぶものがあったのである。やがて事件は、実録のかたちで、あいついで刊行された。すなわち判決の下された一八八〇（明治十三）年に発売となったのが、

相州奇談 真土酒月畳松蔭　伊東市太郎 作
冠松真土夜暴動（よあらし）　武田交来 作
真土村義農精心（たましい）　雑炊亭狸雄 作

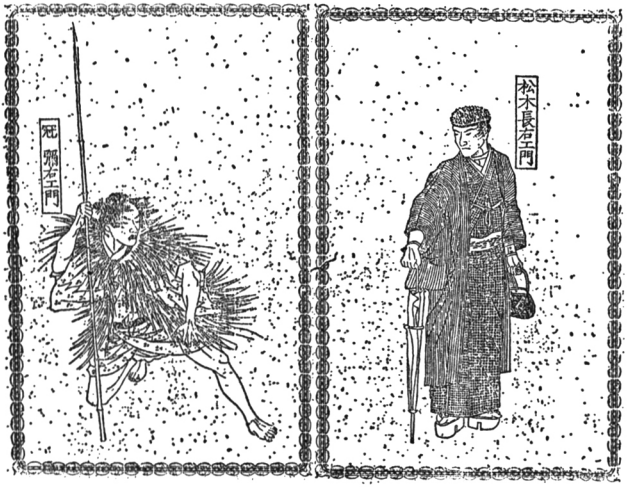
などの諸作であった。作者は、いずれも戯作者の流れをひく者であり、小説というよりは、興味本位の実録に近い作品であっ



©神奈川県立公文書館

た。しかし庶民にとって義挙を感じられたからこそ、事件はひろく宣伝され、実録もひろく普及したのであった。

こえて一八九三（明治二十六）年五月、泉鏡花は「冠弥左衛門」と題する小説を京都日出新聞に連載した。鏡花の処女作である。舞台は鎌倉に求めているが、題名は真土村の冠弥右衛門にちなんだものであり、筋の展開も真土村騒動にヒントを得ていた。なお鏡花は、つづいて発表した「活人形」「銀時計」も、鎌倉を舞台としている。騒動そのものに関しては、一九〇〇（明治三十三）年に伊原青々園が小説「真土騒動」を東京毎日新聞に連載した。




相州奇談真土廼月畳松蔭（1880年）　神奈川県立文化資料館蔵

同じ一九〇〇（明治三十三）年一月には徳富蘆花の『不如帰』が刊行されている。この小説は一八九八（明治三十一）年十一月から翌年五月まで、国民新聞に連載され、天下の子女の紅涙をしぼったものであった。武男と浪子の別れの場面は、逗子の海岸である。逗子の浜べは、この小説によって全国に知られるに至った。

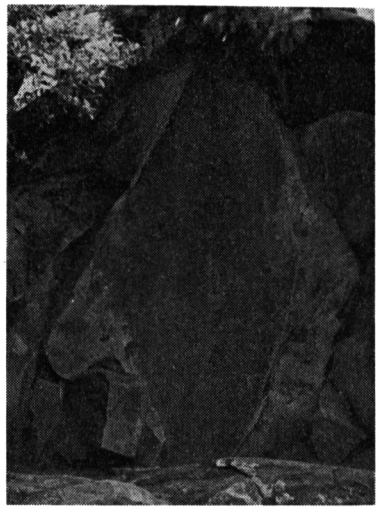
明治三十年代の初めといえば、新聞小説の人気が高まった時期である。一八九七（明治三十）年一月に尾崎紅葉「金色夜叉」の連載（読売新聞）が始まり、熱海の海岸が有名となった。つづいて「不如帰」である。つづいて一八九九（明治三十二）年九月から、菊池幽芳の「己が罪」が大阪毎日新聞に連載され始めた。この小説で舞台となったのが、箱根である。悲劇は箱根でつくられた。しかし幽芳は、箱根の実景を描いていな



©神奈川県立公文書館

い。したがって小説はよく読まれたにもかかわらず、箱根は逗子や熱海ほどに評判とはならなかった。

**北村透谷と小田原**　近代文学の先駆者として、その名を欠かすことのできない者に、北村透谷がある。本名は門太郎、明治元年（一八六八）年十二月二十九日に小田原で生まれた。父の快蔵は藩医であったが、廃藩の後は足柄県の少属として勤め、一八七三（明治六）年には大蔵省に出仕している。透谷は祖父母のもとで、小田原小学校に学んだ。のち快蔵は、再び小田原に帰任したが、一八八一（明治十四）年には一家をあげて上京、数寄屋橋の近くに住んだ。透谷の号もスキヤからとったと言われる。成長した透谷は自由民権の運動に共鳴し、実際運動にも加わったが、やがてキリスト教に入信、しだいに文筆活動を主とするに至る。


小田城址公園に立つ透谷の碑

透谷が『楚囚之詩』を自費出版したのは、一八八九（明治二十二）年四月のことであった。つづいて一八九一（明治二十四）年五月には『蓬莱曲』を発表し、文名は大いに上がった。さらに一八九二（明治二十五）年二月、女学雑誌に「厭世詩歌と女性」を発表、深く感銘を与えた。一八九三（明治二十六）年一月には雑誌『文学界』が創刊され、島崎藤村・馬場孤蝶・上田敏らが参加したが、このグループを指導し、旗印と目されたのは透谷であった。

文士の前にある戦場は、一局部の原野にあらず、広大なる原野なり、彼は事業を斎（もた）らし帰らんとして戦場に赴かず、必死を期し、原頭の露となるを覚悟して家を出るなり。

キリスト教の感化をうけ、あくまでも理想を追求した透谷は、ついに人生の内なる闘いに敗れた。一八九四（明治二十七）年



©神奈川県立公文書館

五月十六日、透谷は自ら生命を絶ったのである。葬儀はキリスト教式によって行われ、芝白金に葬られたが、のちに墓所は小田原に移された。

明治三十年代に及んで、小田原には村井弦斎・斎藤緑雨・小杉天外らが移り住んだ。彼らを訪ねて、文士が小田原へ来ることも多かった。弦斎は「食道楽」を一九〇二（明治三十五）年から報知新聞に連載、天外は「魔風恋風」を一九〇三（明治三十六）年、読売新聞に連載している。緑雨の作品には「小田原日記」があった。

小田原に生まれた作家も少なくない。福田正夫（一八九三〈明治二十六〉年）・牧野信一（一八九六〈明治二十九〉年）・井上康文（一八九七〈明治三十〉年）・川崎長太郎（一九〇一〈明治三十四〉年）らの名を挙げることができよう。尾崎一雄（一八八九〈明治二十二〉年）も伊勢の生まれながら、その家は下曽我であった。しかし彼らが文壇で活躍するのは、大正以後である。谷崎潤一郎や北原白秋が小田原に移ってきたのも、大正年間のことであった。

**県下の文人群像**

逗子から葉山に至る街道に沿って、蘇峰徳富猪一郎の建てた老龍庵が今も残っている。ここは蘇峰が、老父母（一敬・久子）と自分の別荘として建てたものであった。晩年の大作『近世日本国民史』も、ここで執筆された。

徳富邸に近く、かつて柳屋があった（一九五四〈昭和二十九〉年焼失）。蘆花の「不如帰」は、ここで構想を得、書き上げられたものである。また蘆花は、一八九八（明治三十一）年一月から短文の随筆を国民新聞に連載し、一九〇〇（明治三十三）年八月、これをまとめて『自然と人生』と題し、刊行した。このなかには逗子をはじめ、湘南の風物が清新な名文をもって、よく描写されている。大衆作家として人気を博した蘆花であったが、ここでは散文詩人としての力量が発揮され、高い評価を得たのであった。



©神奈川県立公文書館

柳屋には短期間であったが、国木田独歩も滞在していた。独歩は明治四年（一八七一）年に千葉県で生まれ、抒情詩人として、また新聞記者として、名声を得た。そして一八九五（明治二十八）年十一月から、新婚の生活を柳屋で営んだのである。しかし、この結婚は数か月で破れ、終生の傷手を負うことになった。以後は感傷の詩人から、社会および人生への観察を深めた作風に発展してゆく。

独歩が明治三十年代の前半に発表した作品には、しばしば県下に舞台が設けられた。たとえば「忘れえぬ人々」（一八九八〈明治三十一〉年）は川崎の溝の口、「鎌倉夫人」（一九〇二〈明治三十五〉年）は滑川の橋、「運命論者」（一九〇二〈明治三十五〉年）は由比ヶ浜である。このうち「鎌倉夫人」に登場する人物は、一九一一（明治四十四）年一月から『白樺』に連載（一九一三〈大正二〉年三月まで）された有島武郎の「或る世のグリンプス」（「或る女」の前半）にも重ねて登場している。

このとき、すでに独歩は世を去っていた。肺を病んだ独歩は、しばしば湯河原へ療養におもむいた。中西屋を定宿とし、晩年の小品にはよく湯河原を描いている。しかも高熱をおかして痛飲し、ついに一九〇八（明治四十一）年二月には茅ヶ崎の南湖院に入院、六月に死去したのであった。

さて文人をたずねて横浜に及べば、まず評論家の小島烏水が挙げられよう。烏水の本名は久太、一八七三（明治六）年に高松で生まれた。やがて父にともなわれて横浜に移り、横浜商業を卒業して、横浜正金銀行に職を奉じた。金融界・実業界に育ちながら、評論の筆をとったのであった。文芸批判のほかには、山の文学者としても知られている。

烏水の友人に、山崎紫紅があった。本名は小三、一八七五（明治八）年に横浜で生まれた。初めは明星派の詩人として文壇に登場したが、やがて劇作に転じた。作品は「上杉謙信」（一九〇五〈明治三十八〉年）、『歌舞伎物語』（一九〇八〈明治四十一〉年）をはじめ、史劇をもっぱら作り、作劇に新風を盛りこんだ。しかし名家の出身であった紫紅は、しだいに政治へ傾き、市会・



©神奈川県立公文書館

県会議員を歴任して、晩年（一九三〇〈昭和五〉年）には県会議長となる。当然、劇作からは遠ざかっていった。

歌人としては、前田夕暮がある。一八八三（明治十六）年に秦野で生まれ、一八九四（明治二十七）年に上京してからは、短歌ひとすじの道を歩んだ。以後は県下に住むことはなかったが、しばしば墓参のために帰郷している。川崎の二子に実家をもつ大貫かの子は、一八八九（明治二十二）年の生まれ、のち岡本一平に嫁し、歌人・作家として名を成した。

川崎からは詩人の佐藤惣之助が出ている。一八九〇（明治二十三）年の生まれ。民衆派の詩人として、同じく川崎の出身である陶山篤太郎とともに活躍したが、その全盛期は大正以後のことであった。

**明治の歌ごえ**　近代文学の発生にともなって、詩の世界にも新しい形式が生まれた。すなわち新体詩であり、一八八二（明治十五）年に刊行された『新体詩抄』は、近代詩形の方向を示した記念碑ともなった。同じ時期には、西洋音楽の移入にともなって、児童に歌わせる唱歌も選定されている。音楽取調掛の編集による『小学唱歌集』初編が刊行されたのも、一八八二―八四（明治十五―十七）年のことであった。

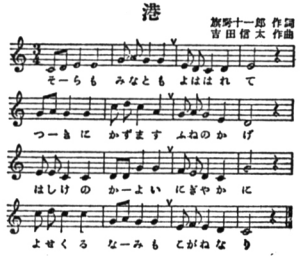
新しい詩歌に曲を付する場合、初めは外国の民謡や名曲を移入することが多かった。唱歌にしても、やがて発達し普及する軍歌にしても、同様であった。しかし日本人の作曲も、しだいに洗練され、すすんで採用されるようになってゆく。とくに日清戦争に際しては、すぐれた作詞・作曲が多くあらわれ、国民の間にひろく歌われるに至った。

戦争が終わった翌年、一八九六（明治二十九）年一月に刊行された『新編　教育唱歌集』第一集には、伸びゆく時代にふさわしい新しい歌が、かず多く採用された。そのなかの一つが、横浜をうたった「港」である。作詞は旗野十一郎、作曲は吉田信太であった。

「空も港も夜ははれて」と始まる軽快な歌詞に、作曲は旧来の伝統を破った四分の三拍子であった。それまでの歌謡は、古



©神奈川県立公文書館



教育唱歌「港」楽譜

い曲調の流れをひく四分の四拍子が主体となっていたのである。そこに突然、若い作曲家の新鮮な感覚をもって、ワルツ形式の曲が付けられたのであった。「港」はダンス曲としても用いられ、歌いつがれて全国にひろまった。

汽笛一声で始まる「鉄道唱歌」第一集が発表されたのは、一九〇〇（明治三十三）年五月である。東海道線の風物のほか、川崎の大師鉄道、横須賀線に沿って鎌倉と横須賀、また小田原馬車鉄道も歌いこまれた。

その翌年、一九〇一（明治三十四）年三月には、東京音楽学校から『中学唱歌』が発行された。ここには滝廉太郎の作曲になる「箱根八里」「荒城の月」が収められている。「箱根八里」の作詞は鳥居枕で、箱根の山を函谷関、あるいは蜀の桟道に比し、八里の岩根を踏み越える勇壮な武士（もののふ）と健児（ますらお）を歌い上げた。これに滝の旋律曲が付せられ、明治を代表する名歌となった。

こえて一九〇九（明治四十二）年七月一日、横浜は開港五十年を迎え、盛大な祝典を挙行した。横浜市は、市歌の作詞を森鷗外に依頼した。こうしてできあがったのが「わが日の本は島国よ」で始まる絶唱である。作曲は東京音楽学校の南能衛であった。

あくる一九一〇年一月二十三日、いたましい事故が七里ヶ浜の沖で起こった。逗子開成中学校の生徒十一名と、小学生一名が、逗子の浜べからボートを漕ぎ出し、遭難して、全員が溺死（できし）したのである。事故から二週間後の二月六日、開成中学校の校庭で合同葬儀が営まれた。葬儀には姉妹校である鎌倉女学校の生徒も参列した。読経のあと、女学生たちは教師三角錫子にしたがって祭壇の前に進んだ。三角が奏するオルガンに合わせて、女学生たちの合唱したのが、真白き富士の嶺の「七里ヶ浜の



©神奈川県立公文書館

哀歌」であった。三角の作詞を、米国のT・W・ガーデンの曲にのせたものである。哀悼のしらべは、悲しみに打ちひしがれている遺族たち、参列者の胸をえぐった。のちには演歌師が、この歌をバイオリンにのせて全国を流れ歩く。明治の末から大正にかけて、七里ヶ浜の哀歌は津々浦々にひろまった。

七里ヶ浜のいそ伝い、で始まる「鎌倉」の歌が発表されたのも、一九一〇（明治四十三）年七月のことである。文部省の『尋常小学読本唱歌』に採用されたものであった。いわゆる文部省唱歌は、ここに始まった。鎌倉を、箱根を、そして横浜をうたった明治の歌は、時代をこえて今日まで歌いつがれている。



©神奈川県立公文書館